

類聚方函（明治20年12月刊）にみられる 麻酔剤と歯科用薬物*

日本大学松戸歯学部麻酔学教室 谷津三雄** 石橋 肇**
落合俊輔** 北嶋まつ子**

歯科の薬物学書は高山紀斎述「歯科薬物摘要、完」¹⁾（明治19年2月刊）が最初である。また、明治時代における一般薬物学書のベストセラーは、飯高芳康、青木純造同纂、「日本薬局方備考・完」²⁾で本書の初版は明治20年5月25日でその後、増補改正を重ね、その第14版は明治27年10月1日に発行されているが歯科用薬剤についての記載はみられない。

草野元養纂訳「類聚方函」³⁾（明治20年12月出版）（図1）は11×15.5 cm 大の小冊子で180ページ中に779種類の処方記載され、そのうち「歯科用剤」として769より779に至る11種類の処方がある（図2）。

今回は、この「類聚方函」を資料とし歯科に関する薬物及び麻酔に関する薬物を調べ、歯科薬物学史及び麻酔学史上の研究資料に供したいと思う。

類聚方函の例言

此書ハ主トシテ独之國「ライプチッヒ」大学内科教授「ドクトル」ストリュンブエル氏及「ドクトル」ヘルマン・キョーレル氏ノ臨床処方録中最良ノ薬方ヲ記述シ旁ヲ我ガ医科大学外国教師及ヒ内国教員ノ処方ヲ附記シ且ツ未ダ外国薬局方ニ収載セザル「コカイン」「イクチオール」「アンチピ



図1

リン」「アンチフェブリン」等ノ如キ有効新薬ノ処方ヲ其主治効用ニ随テ類聚編纂シ小冊子ト成セルモノナリ——とあり、また「此篇ニ掲クル諸家処方一々其出処ヲ區別セス且ツ其分類ノ如キハ或ハ効用ニ由リ或ハ用法ニ由リ一定ノ方法ナキモ専ラ治療家實際使用ノ便ヲ目的トセリ」から本書の記載方法を知る。

「類聚」とは、部類に従ってあつめることであり、「方」は医療の術を意味するので薬剤別に分類して主治に従って医療として使用するに簡便に

* Anesthetics and dental drugs in "RUIISHU-HOKAN" published in Dec. 1887

** Mitsuo YATSU, Hajime ISHIBASHI, Syunsuke OCHIAI, Matsuuko KITAJIMA: Department Aneesthesiology Nihon University School of Dentistry at Matsudo

(イ)尿道注入劑	一五九
(ロ)腔内注入劑	一六二
皮下注入劑	一六三
散布劑	一六七
罨濕劑	一七〇
綑帶用膏劑	一七三
洗滌水	一七五
齒科用劑	一七八

類聚方函目次了

图 2

まともあげたものと思われる。

薬剤と主治

本書に示されている薬剤のうち麻酔や歯科に係るものを摘録し参考以供すれば次のとおりである。

○解熱剤の項の〔20〕アンチピリン 10.0，餉水 10.0，右1乃至2筒皮下＝注射スとあり，新葉のアンチピリンの皮下注射が示されている。

○吸入剤の項の〔96〕に罈囉仿謨 30.0, 依的児 60.0, 精製の列並底油10.0, 右混和咳嗽発作前一茶匙ヲ蒸氣トナシ嗅入スとあり, 百日咳に使用した。まさに, クロロホルムとエーテルの吸入であるので全身麻酔により鎮咳されたと思われる。

〔105〕のコカインは1.0乃至2.0㊳水 100.0 右混和 5 分時乃至15分時間吸入スとあり喘息と痙咳に使用するとあり、新薬のコカインは局所麻酔としての使用でないことを知る。

○含嗽剤及ヒ咽喉・鼻腔粘膜塗擦剤の項に、

○屢々応用スル塗擦薬液として硝酸銀，明礬沃度丁幾，酒精などもあげている．また，含嗽剤とし

ては格魯兒酸加里，明礬などを餾水でとかして用いられている。

〔115〕撒爾比亞浸15.0，明礬2.0乃至4.0蜂蜜30.0右混和口中洗滌用として齒齦炎或は潰瘍の主治薬として用いられる。

〔119〕樟腦1.5，稀酒精適宣，薄荷水180.0乃至240.0，明礬4.0，蜂蜜30.0，右混和口中洗滌用として唾液漏（流涎）の主治薬として用いられる。

[130] 罂嚙仿謨 5.0 乃至 10.0, 酒精100.0, 水 200.0, 薄荷油 5 滴, 右混和含嗽用として齒齦炎 衝, 齒根骨疽の主治薬として使用される. なお, 齒痛に対しては[137]阿片越幾斯0.2, 餹水120.0, 蜂蜜20.0, 右混和含嗽用とあるが阿片が含まれて いるのでよい鎮痛効果がえられたと思われる.

○衝動剤（興奮剤）の項に〔160〕依的児20.0、右皮下注入剤トナス、1回1筒ヅツヲ注射ス はエーテルの皮下注射のため激痛を訴えたと考えられる。そのためか〔161〕依的児10.0、右10乃至20滴ヅツ砂糖ニ滴下シテ用フと経口投与もあげられている。おそらく、エーテルの興奮期を利用したものである。

○麻酔剤の項には〔381〕から〔389〕までは塩酸莫
児比涅の主剤とし、疼痛、痙攣、咳嗽などに使用
されている。そのうち〔387〕塩酸莫児比涅0.01、
咖啡浸100.0、右頓服は頭痛に効ありとは面白い
処方である。

〔390〕から〔392〕までは抱水格魯刺爾を主剤であり、その他〔395〕と〔396〕は印度大麻越幾斯が主剤である。

このように、現在の麻酔剤のクロロホルムやエーテルは使用されていない。しかし、この時代には麻酔剤を迷朦剤として使用していた成書の多いのに麻酔剤 Narcotica として記載している本書は特筆されてよい。

○解毒剤の項に〔479〕依的児中毒に

- 1) 安母尼亞水15滴, 餵水2, 00, 右頓服ス
- 2) 安母尼亞水30.0, 右嗅入料と記載されてい

〔499〕 哥囉仿謨中毒に

- 1) 安母尼亞水50.0, 右嗅入劑ト為ス (又冷水ヲ頭上ニ灌漑スルカ或ハ氷ヲ載ス)

2) ザイドリツ散 2包, 右1包ヲ与フ

3) 硫酸銅1.0, 餡水40.0, 右吐剤トナス

[523] 莫兒比涅中毒に

硫酸銅 1.0, 餡水 40.0, 右吐剤トシ先ツ其半ヲ与エ, 効驗ナキトキハ5分時ヲ経テ其残余ヲ与バレ, 其他咖啡50.0, 右浸出シテ200.0ト為シ之レニ单舎利別50.0, ヲ加ヘ与フ毎5分時1食匙宛

[536] 曼陀羅華中毒に莫兒比涅中毒の条ヲ見ルベシとあり, この時代には華岡青洲の使用したマンダラゲを使用した麻酔も多く使用されていた頃であったと思われる。

○皮下注入剤は今日の皮下注射剤と思われるが[697] 法列兒氏水や[698] 塩酸莫兒比涅[700] 樟脳などが使用されていた。

なお, [704] 咖啡涅0.5, 餡水酒精各2.0右皮下ニ注入ス, 偏頭痛に効があるは今昔の感が深い。

最終は, ○歯科用剤で[769] から[779] に至る11種の処方が見られる。

それによると, 歯痛薬が7種, 歯牙不潔に用いるもの3種, 消化不良に用いるもの1種となっている。

そのうち, 歯痛に使用される薬剤は[769] 結麗阿曹篤[770] 加耶布的油, [775] 嚙囉仿謨塩酸莫兒比涅, [771] 阿片丁幾, 依的兒などを主剤とし何れも「右小綿球ニ浸シ齶齒中ニ挿入ス」と記載されている。

また, [772] は乳酸 3.0, 雲母 25.0, 橙花油 1滴, 丁香油 2滴, 右混和シ磨齒粉トス

[774] は密兒拉 酒石各10.0, 菖蒲根20.0, 木炭末40.0, 右研和磨齒散ト為ス

[777] は乾燥炭酸曹達5.0, 薄荷水120.0, 水製大黃丁幾1.0, 右混和齒牙洗淨水トスなどの3種類の処方歯牙不潔に対する処方であり, [773] では菖蒲根 15.0, 木炭, 石礬各 4.0, 丁香油 1.2, 右研和シ磨齒粉トスとあり消化不良に効があると記載されているがこれらは, 今日の煉齒磨や齒磨粉および含水剤であって, これは歯科薬物学史上のみならず口腔衛生学史上特筆されてよいと思う。

結 び

著者らは, 草野元養纂訳「類聚方函」(明治20年12月出版)を資料とし, 麻酔剤, 鎮痛剤, 歯科用剤などについて検討し歯学史上の貴重な資料であることを明らかにした。

さらに, この時代には麻酔いとう用語より迷朦, また歯科というより口中科が使用されていた当時を考えれば本書が使用した用語も歯学史上特筆されてよい。

文 献

- 1) 高山紀斎: 齒科藥物摘要・完, 有新堂蔵版, 東京, 明治19年2月.
- 2) 飯高芳康, 青木純造同纂: 改正増補 日本藥局方備考・完 第14版, 明治27年10月.
- 3) 草野元養纂訳: 類聚方函, 丸屋善七, 東京, 明治20年12月.